

Yahoo 知恵袋で以下のやり取りがされていました。

古代メソポタミアの神殿での売春が国家を挙げての事業であったことが分かります。

■質問

バビロニアで行われていた神殿売春は貴族や王族の娘にも義務付けられていた？

女神ミュリッタの名のもとに行われていた古代の**神殿売春制度**ですが、これが当時の女性の義務と言われていたそうですね？古代ギリシャの**歴史家ヘロドトス**がそう書いているようで多産と豊穡を願う宗教儀式だったそうです。

では一般人同様に貴族や王族や神官の家に産まれた女性は一生に一度は神殿売春をしなければならなかったのでしょうか？例外は存在しませんか？

■ベストアンサー

神殿売春において、初期と後期とを分けて考える必要があります。

古代メソポタミアでは、国力＝人口でした。そのため、多産が奨励されました。

また**神殿売春**は、主に多産と豊饒の女神である**イシュタル**神殿で行われました。

男たちは、イシュタル女神に供物をささげ、そこで豊饒の儀式を行ったのが起源です。

女性は、そこで働いて得た資金を持参金として嫁ぐのが慣例でした。王の娘でも、例外ではありませんでした。これが前期の話です。

しかし、都市の規模が大きくなると、とても全員がそのような事をしていられなくなります。そのため、**神殿に勤める専用の巫女が生まれ、男性の相手をするようになります。**

これが後期です。

>つまり後期の神殿娼婦は初期神殿娼婦の末裔で歴史がある分特別な身分の神職という事ですか？

この事に関しては書かれていませんでした。ですが、特別な家系ということはないと思います。

>豪商や大名などでないと相手が出来ない日本の花魁の様な存在だったのでしょうか？

後期においても、原則的には、男性がイシュタル神に供物をささげ、豊饒を願う儀式には、かわりなかったようです。

あくまで**神殿売春は、女神への賛歌**であり、娼館とは、全く異なる存在です。

神殿巫女は、あくまで、イシュタル女神の代理ですから、巫女がステータスとなる事は、考えにくいと思います。ただし、後期で、専属巫女の場合は、ありえたかもしれません。